新相撲の開催とその隆盛
～北海道の二つの女相撲大会を見て～

Holding sumo wrestling and the prosperity
—Two woman sumo wrestling rallies of Hokkaido are seen—

下川隆司*, 二ツ森修*, 屋田敏弘*, 小山泰文*
古谷洋一*, 佐藤和裕**, 下川学***, 下川哲德****

Takashi SHIMOKAWA *, Osamu FUTATSUMORI *, Toshihiro OKUDA *
Yasufumi KOYAMA *, Yoichi FURUYA *, Kazuhiro SATO **
Manabu SHIMOKAWA *** and Tetsunori SHIMOKAWA ****

ABSTRACT

Women's sumo matches as one of the established custom events are held at Teshikaga Town and Fukushima Town in Hokkaido. When we watch cheerful and active female players playing sumo matches exiting, we don't feel incompatibility and can enjoy genuine women's sumo matches as similar to general matches. When we check up the origin of the maches, we can give the reason as the first one that both towns produced a number of sumo wrestlers of the highest rank and therefore the great numbers of townspeople have a mania for it. And we can give the second reason that the both town are conspicuous by female activity. Shin-sumo started as taking the rising opportunity of the international female activities. Therefore, it seems, that such women's sumo matches as one of general matches have been held for many years suggesting for shin-sumo.

はじめに

先の「体育研究所報」第18巻（平成12年3月25日発行）で、私たちは「新相撲の発足と今後の課題」を発表した。そこでは、新相撲の発足の経緯と今後の課題を探るとともに、わが国における女性による相撲の歴史も考察した。その結果、「女性相撲は雑物、見世物に過ぎなかった」、これまでの一般的な見方は必ずしも正しいとはいえず、男性の相撲と同じような取組が組まれた興行が、少なくとも江戸時代から行われていたことが確認できた。

今回は、北海道で毎年行われている二つの「女相撲大会」を、スポーツ競技という観点に重点を置いて考察した。新相撲はまだ始まったばかりであるが、北海道の大会の一つは30年近い歴史を重ね、もう一つも10年続いており、新相撲の今後を考えるとき、この二つの大会が何らかの示唆を与えてくれるのではないかと考えたからである。

* 国士舘大学 (Kokushikan University)
** 道都大学 (Dohto University)
*** 東京純心女子大学 (Tokyo Junshin Women's College)
**** 吉林大学 (Kyorin University)
１．川湯温泉全道女相撲選手権大会
（北海道川上郡弟子屈町）

１．昭和の大横綱・大鵬の出身地
北海道川上郡弟子屈町は、世界有数の透明度を誇る摩周湖を抱き摩周岳の山麓に広がる起伏の多い高原地帯にあり、東は根室高原、南は標茶町を経て釧路湿原に隣接している。また、町の西部にはカルデラ湖として名高い屈斜路湖がある。町の全面積の70％が山林で、農耕地は少なく、酪農が中心となっている。硫黄山を源流とした川湯温泉は、硫黄のにおいの立ち込める道内屈指の温泉で、また、町の中心街にある摩周温泉は道東最古の温泉街とされ、弟子屈町には毎年多くの観光客が訪れる。
昭和の大横綱といわれた大鵬は、この町の出身である。昭和59年には川湯相撲記念館が開館し、館内には大鵬の偉業をたたえる品々が展示されている。大鵬は平成2年、名誉町民の第1号となった。大相撲弟子届場所がこれまで何度か開かれるなど、相撲熱も盛んだ。「川湯温泉全道女相撲選手権大会」が始まったのは昭和47年と古く、今では秋に欠かせない行事の一つとしてすっかり定着している。

２．川湯温泉・女相撲大会の始まり
ホテルや旅館、土産物店や飲食店が並ぶ川湯温泉の飲食店組合では、訪れた観光客への感謝の一環として、以前から観光の開業期に入る9月の第1日曜日に、歌や踊りのイベントや楽しみなどを出して感謝祭りを行っていたが、昭和47年、なか新らしい催しを集めようというふたたび。当時の横綱大鵬の出身地だけあって、男性の相撲大会は行われていたが（現在は行われていない）、これとは別に、主として温泉の女性従業員が参加できる催しとして、女相撲大会を開催することにした。しかし、参加者は特に旅館の従業員に限ったわけではなく、成人女性なら誰でも参加できるようにし、当日川湯温泉を訪れていた旅行客にも飛び入りの参加を呼びかけて、第1回の女相撲大会が開かれた。

神事や興行としての女性による相撲は、かつては全国各地で行われていたが、当時、これらはほとんど姿を消しており、純粋に競技としての女性による相撲大会としては、全国的にもこの大会が初めての試みであったといっていいのではないか。

服装は、短パンやティーシャツ、トレーナーを各自に用意してもらうことにした。会場は感謝祭りのイベントを行っている芝生地の催し広場の一角で、そこに角材で土台を作り、その上に坐せて土俵を設けた。

参加者は旅館従業員が殆どかかっており、試合前に通いなれた川湯神社に必勝祈願のお参りをする人もいた。

試合はトーナメントで行い、優勝を争う形が取られた。選手は東西に分かれ、土俵に上がるとしゃがんで拍手を打ち、それから立ち合った。これはアマチュア相撲の形とほとんど変わらないもので、あくまでも競技としての相撲を行おうという考え方に立っていた。行司（大相撲の行司の服装をした）もイベントの司会者に見られながら引き立て役を兼ねるというより、土俵をさばくのに徹した。このときの大会運営の姿勢はその後もずっと変わらず、現在まで引き継がれている。この点、和やかで楽しめる催しに重点を置いた福島町の「南北海道・女だけの相撲大会」と好対照である。

大会に参加する選手は皆、相撲を取るのは初めての人ばかりだったのは当然である。しかし、事前に相撲のルールを教えるということをせず、実際に何番か試合を行ううえに、選手がそれを見て要領を会得するという形を取りながら試合は進められたが、とくに不都合はなかったようである。

３．川湯温泉全道女相撲選手権大会
その後、大会で大きく変わった点を挙げると、まず、第6回大会から主催者が飲食店組合から川湯温泉観光協会へと変わった。大会が恒例行事と
新相撲の開催とその隆盛 ～北海道の二つの女相撲大会を見て～

して定着し、また、女性による相撲大会が珍しいことから、マスコミでも取り上げられるようになっているため、観覧協会が主催して、さらに盛り上げることにしたのである。

選手の服装も、マスコミに取り上げられたとき中に目を引くようにと、ユニフォームとしてジーンズの短パンに大会名を記したティーシャツの上下を主催者が用意するようにした（さらしを帯状に巻いて短パンのベルト穴に通して「まわし」としているのは、第1回大会から変わっていない）。

ティーシャツは大会終了後、記念として参加者に持ち帰ってもらう。

開催する会場は第1回大会から変わらないが、特注の土俵をこの大会のために用意し、毎年この土俵を使うことにした。これはウレタンのマットの土俵で、相撲の土俵と似ているが、大きさ（直徑）がやや小さくなっている。これまですぐ変わると怪我はあったが、大きな怪我は起きていな

い。開催に際して、主催者側でスポーツ保険に入ることが、それ以上の負担が出る場合を考慮して、自由で保険に入るように事前に呼びかけている。

参加人数については、はじめの頃は飛び入りが中心だったので正確な数は不明だが、最近は80人前後が多く、数年前は100人を超えたこともあった。参加者が地域中心だったのは第1回大会くらいまでで、その後は道内はもちろん、本州や九州からの参加者も出るようになった。当日の朝まで参加の受付を行っているので、たまたま旅行に来て飛び込んで参加する遠方の人もいるが、わざわざこの大会のために遠方から参加する選手も出てくるようになったためである。

参加の呼びかけは、道内のテレビスポッットで行ったり、報道関係に予告記事の掲載を依頼している。その他、近隣には新聞折込のチラシを入れているが、最近は定着してきたこともあって、参加の募集にとくに力を入れるということはなくなっている。参加の受付は原則として大会の1ヶ月前から受け付けて、8月末日で締め切ることにしているが、特別の参加費用は徴収していない。い

わば、無断でキャンセルが簡単にできるようになっているわけではない。主催者にとっては、これが一番の問題である。何回会を廃れても、大会当日の朝、どれだけ参加者が集まるか心配だという。そのため、キャンセルを見越して、大会当日の朝の参加受付も行っている。

受付は朝の8時から9時まで。その間に申し込みに来た人に抽選伝を渡し、その結果によってトーナメント表を作るが、運営に携わる人たちにとってこのときがもっとも忙しいときである。

取組はトーナメントで行うので、早々と負けた人はその後の試合に出ることができなくなる。それだけ救済するためには、はじめにA組とB組のクラス分けの試合を行っている。1回戦で勝った人をAクラス、負けた人をBクラスに分け、以後、各クラスでそれぞれトーナメントを行い、優勝を争うことになるが、大会の終盤的な選手権はAクラスの優勝者がなるのは言うまでもない。

優勝者の賞金は、はじめの頃は10万円だったが、昭和63年に20万円にアップされ、さらに平成6年の大会から30万円となった（Bクラスの優勝賞金は5万円）。また、2位、3位の現在の賞金はそれぞれ10万円（同3万円）、5万円（同2万円）である。さらに、参加者全員に参加賞として5000円が授与される。協賛している会社や地域の商店から提供される副賞も多数に上り、賞金と副賞の総額では300万円ほどに達する。副賞のうちとくに目を引くのが、優勝者に与えられる金になっているボニー1頭だ。昭和61年の大会のとき、マスコミの取材が集まるようになり、奇抜な副賞として子牛1頭を出すことにした。その後、数年前から子牛より扱いやすいポニーが副賞となった。その他の副賞では、女性が対象になることから、掃除機や洗濯機などの家電製品や最近では健康器具などが多々となっている。

こうした豪華な賞金や賞品が出されるため、試合にのぞむ選手の意気込みもたいへんなものがある。取組のはじめのうちは、初出場の選手も多く、立ち合いがうまくいかなかったり、取り組んでも
相手を引き戻して、そのはずみ自らから尻餅をついて負ってしまうような取組も見られる。土俵を裁く行司は大変だが、選手に注意することはほとんどなく、両者の呼吸を合わせて裁くことに専念している。あくまでも競技としての女相撲大会を行っているという姿勢である。土俵下では、素人ながら４人の検査役が勝負の判定に目を光らせている。取組の結果のアナウンスも、どちらが勝ったかを告げるだけで、決まり手などのアナウンスはなく、淡々と進められるという感じである。選手の呼び出しも苗字で行い、四股名はついていない。

試合が進み上位陣の対戦となったところで、大会の常連組が占めるようになり、取組にも力が入ってくる。土俵中央でがっぷり四つに組み合い両者互いに頑らなかったり、豪快な手投げで勝負がつく取組も出てくる。さらに、準決勝からは、立ち合い前に四股を踏む動作も加わり、観客の熱気も一段と盛り上がってくる。およそ3000人の観客が狭い園地に詰め掛け、ひいきの選手に声を嗄らして声援を送る。

優勝者は優勝旗が授与され、翌年の大会に優勝旗が返還されるという形が取られている。

優勝者についてでは、これまで2連覇する人はいたが、それ以上はまだ出されていない。年齢の若い選手が上がってきても世代交代が進むので、3連覇以上はむずかしいようである。参加資格は18才以上（ただし、高校生は試合に出場できない）となっており、これまでの最年少者は18才、最年長者は59才であった。

町の伝統行事の一つとなった感のある全道女相撲選手権大会だが、これだけ長く続けている理由は、主催者の努力もあることながら、賞金、賞品の豪華さももっとも大きいといえるかもしれない。優勝した選手は、「こんなにももらえるなら、来年もまたがんばろう」と連覇を目指い、優勝賞金を逃した選手は、「来年こそ、私がもらえる」と燃えるに違いない。上位を目指さない選手でも、記念として大会に出場しただけで参加賞金がもらえるから、「ためしに出てみよう」と、思い切って出る女性もいる。

しかし、こういう要素も大きいのは確かだが、大鵬を生んだ町であり、相撲を愛する多くの町民がいるからこそ実現できることである。

同じ北海道内の福島町の「女だけの相撲大会」

川湯温泉女相撲選手権大会の選手のユニホーム。ヒモをまわし代わりに使っている。

特設の土俵風景。大勢の観客が見守る中試合が進められる。

第29回川湯温泉女相撲大会の結果を知らせるホームページ。（http://www.masyuko.or.jp/onnazumo.html）
について、弟子屈町の女相撲大会関係者は、「互いにそれぞれのやり方があるので、それぞれが工夫して盛り上げていけばいいのではないか」と、女相撲大会では大先輩に当たるだけあてって、至ってクールである。しかし、参加者の一部から要望が出ている四股名を採用するかどうかなど、福島町の大会のように、もう少し面白さを出すことも今後の検討課題だという。2001年、ちょうど新世紀を迎える年に30回目の大会となるので、関係者の間では、新しい趣向を加える転機にしたいと考えた。

いずれにせよ、新相撲が正式にスタートし世界大会も開催されるようになったことを考え合わせると、競技に力点を置いた女相撲大会が定着していることは、すばらしいことであり、今後も発展していってほしいと願わずにいられない。

II. 南北海道「女だけの相撲大会」
（北海道松前郡福島町）

1. 漁業の町・横綱の里

北海道松前郡福島町は渡島半島の南端に位置しており、青函トンネルの北海道側の入り口となっている。町の総面積の93%が山岳・丘陵地で、津軽海峡に転げ落ちるように高地が迫っているが、気候は対馬暖流の影響を受けて、年間を通じて比較的温暖だ。北海道の漁業の発祥の地として、鰤漁で大いに栄えたことは今では古老たちの懐かしい語り草となっているが、現在も福島町が漁業の町であることには変わりはない。また、江戸初期には、千軒魚で北海道初の砂金採取事業が行われたところもある。

初と言えばもう一つ、福島町は全国でも初めて、一つの町から千代の山と千代の富士の二横綱を輩出した町でもある。そのため、町民の相撲熱はたいへんなもので、横綱街道や横綱橋と名づけられた道や橋、土俵をかたどったロータリーなど、町のそこかしこに「横綱の里」の雰囲気が漂う。二人の横綱を記念して横綱大鼓も新たに制作され、さまざまな機会に披露されている。平成9年には町立「横綱記念館」もオープンし、観光客集めの一役買っている。この町で毎年5月の母の日に、南北海道「女だけの相撲大会」が開催されており、その数は今年（平成12年）でちょうど10回を数えた。

2. 第1回・女だけの相撲大会の開催

漁業は一見男の仕事のように見えますが、女性の力がなくては成り立たないものである。とくに福島町ではスルメイカ漁が盛んで、スルメイカが水揚げされた後は、女性の活躍が控えている。また、水産加工場でも、元気に働く女性の姿がときわめ目を引く。他方、出稼ぎ者も多く、必然的に町は女性が支えているという印象を受けることになる。

こうした土地柄もあって、福島大神宮の末社の川瀬（かわせ）神社には、昭和の初期に始まった祭とされる「女だけの祭行列」が、今も伝わっている。この行従は、形の上では10年に一度行うことになっており、このときは満の女性（現在約250人）が社名旗や御神宝を持ち、その後からみこしが続き、町の中心街に繰り出す。

福島大神宮の創建は不祥であるが、天正2年（1574年）に再建された記録が残っている。祭神は

女だけの相撲大会のホームページ。縄を締めた歴代の優勝者が紹介されている。
（http://www.masyuko.or.jp/onnazumo.html）
天照大神と豊受大神で、どちらも女の神様である。川瀬神社は福島大神宮の境内の一隅にあり、創建は明応元年（1492）とされる。川瀬神社にはイザナギの命（みこと）、イザナミの命、せおりつ姫の命の三神が祭られているが、中でも、せおりつ姫は世の中の災や汚れを祓い清めるみそぎ祓いの神とされ、古来、女性の守護神として地元や周辺の女性たちから厚い信仰を受けてきた。神社の名前の由来も、せおりつ姫が川で洗い清めるということから来ている。

平成3年はちょうど川瀬神社の創建500年に当たり、これを記念して「女だけの祭礼行列」が15年ぶりに行われることになった。これを聞きつけたNHKがその様子をBS放送で生中継することになり、福島町観光協会では、この機会を利用して女相撲大会を併せて開催することにした。しかし、同観光協会によると、これは突然決まったものではなく、「横綱の里」として、その2、3年前からひそかに計画を立てていたもので、その下準備として、女相撲大会では先輩の弟子岡町の女相撲選手権大会も見学していたという。BS放送の話が持ち上がったことで、この計画が一気に実現することになったわけである。

そうはいっても、いざ実現させるとなると勝手がよく分からず、観光協会を中心とした関係者の間で試行錯誤が始まるようになった。

まずチラシを用意して、女相撲大会の開催を町民に知ってもらうことにした。それから参加者の募集を始めた。参加人数は25人を予定したが、その時集まって足で訪れ歩き、「テレビでも放送するから」「貯金がもらえるから」などといって参加を呼びかけた。水産加工場には女性が600人〜700人もいるので、彼女達を中心に誘いやすく回ったが、それでも容易に集まらなかった。「恥ずかしい」「家族が反対している」などというのが主な理由で、最終的に参加者は30人にとどまった。このときは、町内を対象にした相撲大会だったが、町外からも数人の女性が混じっていた。

年齢層では、30代から40代の女性が中心となった。次に関係者の頭を悩ませたのが、選手の服装をどうするかであった。相撲はまわし一つで行えるもっとも簡単な格闘技ではあるが、女性による相撲となれば話は別である。現在は主催者側で服装一式を用意し、大会終了後、各自持ち帰ってもらうようにしているが、当時は、短パンにまわし代わりの着物を巻いたものを主催者側が用意し、着方は自前のティーシャツを着てもらった。

土俵に関しては、さすが「横綱の里」だけあって、すでに立派な土俵が福島大神宮内に設けられていた。この土俵はかつて神社の山や神社の富士が巡場所で相撲を取った土俵だ。ちょうど日の底に当たるところに土俵があって、観客はぐるっと取り巻いた天然の桟敷のような斜面に腰を下ろして見物できるようになった。しかし、当時の土俵はあまり使われていなかったので荒れており、その上怪我のことも心配されたので、土俵の上には数センチの高さでおがくずが敷き詰められた。

境内は神聖なところであるという神主の発案により、祝詞をあげお祓いをしてから試合を行うことにした。また、参加者は行列を組んで川瀬神社にお参りし、御神木である乳房樹に母体の安全を祈願した。この乳房樹は樹齢500年、幹の周り全体が乳房の形をしており、この木に触れると産後の母乳の出がよくなると伝えられている大木である。
さて、いよいよ試合開始であるが、参加者全員が相撲を取るのは初めてであり、どのように仕切りをして立ち上がるのか、それすらも知らない人ばかりであった。しかし、ルールが簡単で誰にでもできるのが相撲のよいところで、行司がその都度、唾円水から仕切り、立ち会いまで「手取り足取り」教えて、選手同士を対戦させていった。仕切りで相手と目が合うと、笑い出したり、恐がって後ずさりする選手もいて、会場全体がなごやかな唾円気に包まれる中で試合は進んでいった。4人の検査役、それに決まり手をアナウンスする人もそろえていたが、みんな素人で、決まり手はアナウンス担当者がアドリブ風にその様をうまく表す言葉で観客に告げた。たとえば、粘りに粘って相手を負かせたときには「ただいまの勝負、根性勝ちで〇〇山の勝ち」と放送した。「この大会はイベントであり、面白くて楽しめるのではないか」というのが、主催者側の考え方であった。

四段名をつけることは考えていなかったが、選手たちが思い思いに四段名をつけてきたので、その四段名に従って呼び出しや勝ち名乗りを上げた。

どれだけ観客が集まるかも主催者にとっては心配の種だったが、選手の職場の同僚たちが、「私たちの代表だから」と、そろって応援にかけつける人たちもいて、予想をはるかに上回る観客が集まった。

第1回大会では、優勝者賞金10万円、参加者全員に参加賞として5000円が授与された。その他、この大会を知った地元の商店などが、「勝った人に賞品として出してくれ」と様々な品物を寄せてくれたので、それらが賞品に加えられた。試合後、優勝者は囲を締めて土俵入りをしてもらい記念撮影をしたが、このときは地元にもともと伝わっていった囲を借りて行った。

大会を終えた参加者の感想はおおむね好評であったが、その中でも、相撲を取ることに対して抵抗感の薄れたことがもっとも大きな成果の一つだったといえるのではないか。大会前には誰もが躊躇しながらの出場だったが、「次の大会にも出たい」という選手が多くかったからである。これは観客も同様で、一部で言われる「女相撲は際物」などとはまったく無縁の楽しい唾円気に包まれた大会を、思い思いに観戦したのであった。

主催者は、女相撲大会を開催すれば、一度だけでやめるわけではないと大会前から腹を括っていたが、こうした周囲の好意的な反応やマスコミでの評判が後押しして、毎年開くこととなった。

３．第2回以降の大会

こうして平成3年に初めての女相撲大会が開催されたわけだが、その後の大会の様子はどうだったろうか、次にその様子を見てみることにしよう。

服装は上下の着衣も主催者側で用意することになったが、とくに上着には大会名が大きくプリントされているので、土俵に上がる選手の気持ちはいつも奮い立つことになった。下は短パンを用意しているが、オシャレに気をつけよう女性もいて、派手な模様の付いたストッキングを短パンの下にくくり選手も出てきた。

賞品については、優勝者の賞金10万円はそのまま現在も変わっていないが、参加者全員に対する参加賞金は1万円にアップした。先もって参加費用として2千円を参加者から徴収しているが、これは参加を最終確認するためのものである。しかし、参加費用を払い込んでも当日辞退する人も出るので、毎回数人の補欠を用意している。

名称は南北海道女相撲大会となっているが、とくに参加資格をその範囲に限っているわけではない。申し込めがあれば、どこから参加しても受け付けていている。そのため、子弟町の川湯温泉の女相撲選手権大会と掛け持ちで参加する人もいて、中には福島町で優勝を逃した人がその誇りを抱え川湯温泉の大会に出て、見事雪辱を果たしたことも過去にあったという。

女相撲という競技の性格上、参加者が限られて
いるため、同じ人が毎年続けて優勝をさらしてい
くということも十分予想される。そこでこれを避
けるために、連続3回優勝が続いた人には特別に
名誉称号を与えて参加を強制してしまうことも
考えているが、現在まで連続2回が最高で、名
誉称号を受けた選手はまだ出していない。大会後、
優勝者が誇らかに締めて土俵入りをする綱は町内
にあったものを借りていたが、その後、地元の人
の手作りによる綱が特別に用意された。

土俵は福島大神宮の土俵を第1回大会から使用
しているが、荒れてきたので昨年（平成11年）大
改修をして、立派なやぐらも造られた。名実も
に本格的土俵になったので、初めて土俵上にお
がくをまかずに試合を行った。試合後、選手に
アンケートを取ったところ、賛成反対が半々と
なったが、賛成では、足が滑らなくていいという
ものの、反対では、硬くて倒れたくや退いたとい
うものが、主な意見だった。

大会の総費用は約180万円、そのほかに会社や
商店などの負担金があり、それを金額に
換算すると100万円ほどになる。

怪我に心配されるところだが、これまで、肩や
指の骨を折るなどの怪我をした選手が出た。大会
前に一括してスポーツ保険に入っているが、この
保険を超える負担については、各自に負担しても
らっている。しかし、これに関しても、これまで苦
情は寄せられていないという。

大会を始めた頃は参加者集めに苦労したことも
あって、応募者が募集人員を上回り、「もう、締
め切りました」と参加を断ることになることが多い

催者のいわば‘夢’となっていたが、その夢は第
7大会のときに実現した。

行司は一般的なアマチュア相撲の服装ではな
く、大相撲の行司の服装で試合を裁いている（ア
マチュア相撲では行司といわず主審というが、こ
の大会では同様に行司と呼んでいる）。

検査役は4人つくり、第1回大会のときはすべ
て素人だった。しかし、選手の真剣な取組に応えた
ため、2回大会以降、4人のうちの1人にちば
っこ相撲の指導者を加えるようになった。判断が
微妙なときはもちろん検査役が物言いをする
が、ほとんど同様な場合、行司が「今のは
どっちだかわからない」と頭をひねりながら、
どちらにも軍配を上げず、検査役に判断を委ねる
場面もある。さらには、選手から近くの検査役に
物言いを要求することもある。検査長がマイクで
判定の説明をするのは、大相撲と同じである。取
り直しの判定が出たときなど、選手が「もう、疲
れた」といわんばかりに再試合に望むことで、思わ
ず観客の笑いを誘う。万事、真剣な中にも、和や
かな雰囲気で取組は進められるのである。

4．取組の様子

取組は第1回大会からトーナメントで行われて
いる。最近ではそのほかに、相撲競技に慣れるた
めにトーナメントの前に「花相撲」を称する2人
勝ち抜き戦や3人勝ち抜き戦を行っているが、こ
のとき勝った選手にも豪華な賞品が贈られる。ト
ーナメントだけでは、初戦で敗退した選手はそれ
で試合が終わってしまうことになるが、花相撲があ
るため、少なくとも2回は試合に出されることに
なる。

選手が土俵に上がり、仕切りから立ち会いまで、
行司が一つ一つその動作を教えながら対戦させる
のは、何回大会を重ねても同じであるが、これも、
年に一回の催しなので、仕方のないところである。

塩を撤く動作一つにしても、その撤き方がわか
らず、土俵の外へ撤く選手もいる。行司が、「塩
は土俵の中に撒いて清めるんですよ」と注意し、
観客からも笑いが起こる。当人は頭を掻きながら
もう一度試みるが、今度もうまく撒くことができ
ず、再び観客から笑いが起こるというような場面
も少なくない。

仕切りしても、両足をそろえるということが
できず、徒競走のように足を構える選手も多い。
そのときはすかさず行司が「かっっこじゃないん
dから、両足はそろえて！」と注意する。

女子相撲に限らず一般的な相撲でも、仕切りから
立ち会って両選手が取り組むまではもっとも息を
呑む瞬間であるが、この点、行司の土俵取りの巧
みさには感心させられる。立ち会いまでの行司の
掛け声は決まっているわけではなく、まさに臨機
応変に掛け声を変えて立ち会われる。「はい、腰
を下ろして→手をついて→腰を上げて→はっけよ
い→のこった」「構えて→はい、これが仕切り線
ですよ、これに両手を振って→腰を上げて→はっ
けよい→のこった」「はい、シットダウン→ハん
ドダウン→レディーゴー」（これは、カナダの選
手が出場したとき）というような調子で、次々と
取組を進めていく。決勝戦では、互いににらみ合
っているときに、「これに勝つと10万円、10万円
ですからね」と選手にささやき、緊張を解くのと
忘れない。この行司役には第1回大会からずっと
同じ人が務めており、名物行司として大会には欠
かせない人ととなっている。

試合は全体的に短時間で決着がつく。相撲は押
しが本質であるが、押すよりも引っ張って相手を
引き倒そうとする選手が多く、互いに引き合って
くるくる回る場面も多く見られる。中には始終押
し通す選手もいて、土俵際まで押していくが、腰
が下がっていないため、くっと相手に回られて
先に土俵を割ってしまう選手もいる。体重別でな
いため、大きい選手と小さな選手が対戦するとき
などは、立ち上がった瞬間、小さな選手が「うわっ」と声を上げて自分から後ろへ倒れることも過
去にはあった。ほとんど勝負のついている体勢に
なっても力を抜かず、最後まで逆転を試みる場面
もよく見られるが、むしろ怪我が心配されるところ
である。

しかし、準々決勝あたりから、試合内容はまと
まってきて、土俵中央でガブリ四つに組み合う
試合も出てくる。そんなときは、思わぬ観客も手
に汗を握り、家族や友人からは盛んに声援が飛び
交う。上手投げや押し倒しなどの決まり手で勝負
がつくようになり、見ごたえのあるものが多くなる
ことである。全体的に見ると、少し工夫すれば勝てるような
状況になってしまう、自分から転げてしまうような場
面もあり、端から見ているところだけに見える取
組も少なくない。しかし、普段相撲を取ったこと
のない女性ばかりなのだから、これも仕方のない
ことではある。それに、当の本人たちは真剣その
もので、無我夢中で一生懸命相撲を取っているの
はいうまでもない。その証拠に、負けて家族や仲
間のところに戻ると、悔し涙を流す選手も多い。
反対に、「去年まで一度も勝てなかったが、今年
一つ勝つことができて満足している」と喜ぶ選手
も多い。

試合をする当人たちのこうした気持ちと、観客
（あるいは、楽しく面白く行いたいという主催者
側）とのギャップが、この大会の特徴の一つとい
えるかもしれない。また、出場する選手は誰もが
明るくはつらつとしており（もちろん、体の大き
な選手がほとんどだが）、選手たちが織り広げる
熱戦を観戦していると、現代女性がもっとも嫌う
「デブ」や、流行となっている「ダイエット」と
はまったく無縁の世界に身を置いているのではないかと思われてむしろ、体が大きくてつら
つとした女性がうらやましくさえ思えてくるので
ある。まさに、女性が主役の町、福島町ならでは
の北海道「女だけの相撲大会」だといえるので
はないだろうか。
終わりに

「女相撲大会」の開かれている弟子屈町と福島町の二つの町は、ともに女性の活躍が著しいことが共通点となっている。新相撲が始まった理由の一つにも、女性の社会進出の需要が高まり、相撲を含めた格闘技に対する女性の欲求は、今後ますます高まっていくことが予想される。こうした潮流をしっかりと引き取って、競技人口を増やしていくことが、新相撲のもっとも重要な課題であろう。

女性が相撲を取るということに対する社会的な認知度は、まだ十分とは言えない。しかし、北海道の二つの大会を通じて感じられることは、女性による相撲が、選手はもちろん、観客にとっても違和感なく受け入れられ、競技として楽しむということである。したがって、この点においても二つの大会は、新相撲の今後の発展に関して、多大の示唆を与えるのではないかと思われる。

第3回全日本新相撲選手権大会。観客は北海道の大会よ
に及ばないが……。